遠山因幡入道坐像について

――戦国期鎌倉日蓮宗の檀越――

寺尾英智

はじめに

在地の寺院が発展していく上で、有力檀越は重要な存在である。開基檀越や中興など、様々な形を取り寺院の歴史に名を刻んでいることも多い。このような檀越を具体的に示すものの一つに、画像や彫像による檀越像がある。日蓮宗における彫像の事例を掲げると、

川崎市妙遠寺　小泉次太夫像
鎌倉市妙隆寺　千葉胤貞像
横須賀市大明寺　石井則次夫妻像
厚木市妙純寺　本間重連像
海老名市海源寺　大島正時像
千葉市本寿寺　酒井定隆像
身延町久遠寺　波木井日円像
身延町端場坊　四条金吾夫妻像
京都市常徳寺　後藤長乗夫妻像
福山市常國寺　渡辺氏歴代像
小城市光勝寺　千葉胤貞像

などがある。[1] 本稿では、このような檀越として、戦国期鎌倉の遠山因幡入道を取り上げ、その坐像について紹介したい。

遠山氏は、鎌倉長勝寺に御堂を建立した檀越である。長勝寺には、この遠山氏の夫妻像が安置されていたことが江戸時代の地誌『新編鎌倉志』に記録されている。一方、現在長勝寺に程近い安国論寺には、日朗坐像が所蔵されるが（以下、安国論寺像という）、この安国論寺像こそ、記録された遠山因幡入道坐像であると考えられるのである。そこで、同像の特徴について検討を加えて位置づけを明らかにし、更に遠山氏の活動についても言及したい。

長勝寺は、京都本圀寺の旧地であるといい、その発祥は妙法寺・安国論寺と共に日蓮の松葉谷草庵跡の一つであると伝承される。[2] 中世の鎌倉において、同寺は六条門流の拠点であったといえる。遠山因幡入道坐像は、同寺を支えた檀越、さらには戦国期の鎌倉におけ

る日蓮宗のあり方を検討するための史料を提供することになる。[3]

一

安国論寺像[4]は、法衣に五条袈裟を着けた法体の姿で合掌した坐像である。法衣の形状は、襟が三角状に立ち上がった僧綱襟がある僧綱衣ではなく、通常のものである。寄木造で玉眼を嵌入し、彩色仕上げとするが、現状では彩色のかなりの部分が剥落する（写真1）。像高は二九・二センチメートルを測る。脚部裏には、次のような墨書銘が存する（写真2）。

（脚部裏・墨書）
鎌倉名越谷
石井山□（長カ）勝寺　御堂
建立
大檀那　俗名
遠山因幡
法名妙助尊儀
永禄七甲子年
卯月廿二日七十五才
巳刻了
施主敬白日□（花押）

この銘文によれば、鎌倉名越谷に所在する長勝寺の御堂を建立した遠山因幡法名妙助が、永禄七年四月二十二日の巳刻（午前十時ころ）に七十五歳で没したこと、また、日□が施主となり安国論寺像を造立したことも分かる。造立の趣旨は、遠山因幡の供養のためであると理解される。[5]施主となった日□は、遠山因幡の近親であるなど関係が深い長勝寺の僧（住持に限らない）が想定されようが、未詳である。

安国論寺像は、日朗像であるとされる。遠山因幡の供養のために日朗像を造立するのであれば、その趣旨が銘文に示されることがあって良い。しかしながら、この像が日朗像であることは、銘文に示されている訳ではなく、専ら遠山因幡の事績のみが示されている。従って、本像の像主は日朗ではなく、遠山因幡であると考えられる。法体姿であることから、入道していたことも分かる。法名は死去に際して授けられたものではなく、入道としてのものであろう。

安国論寺像の衣体は、前述したように通常の衣に五条袈裟を着けている。日朗は日蓮の直弟子六老僧の一人であり、池上本門寺・鎌倉比企谷妙本寺の両山を本拠とする比企谷門流の祖である。日朗の画像や彫像のうち、年代的に遡るものには、次のものがある。

○　日朗画像　鎌倉時代・十四世紀　読経像　京都市本満寺所蔵[6]

○　日朗坐像　南北朝時代・十四世紀　合掌像　大田区本門寺所蔵[7]

両像の衣体は、共に僧綱衣に七条袈裟・横被を着けており、天台

宗系として高位の僧の姿を取っている。さらに、日朗を含め本山・有力寺院の開山や歴代住持などの高僧の坐像について、江戸時代初期までの年次が明確なものを、鎌倉を中心とした東国地域に求めると、

1　日祐坐像　法華経寺三世　僧綱衣、七条袈裟・横被　合掌像　文和三年（一三五四）　市川市法華経寺所蔵[8]

2　日栄坐像　大明寺六世・中興開山　僧綱衣、七条袈裟・横被　禅定像　文安五年（一四四八）　横須賀市大明寺所蔵[9]

3　日静坐像　京都本圀寺四世　僧綱衣、七条袈裟・横被　禅定像　宝徳二年（一四五〇）　横須賀市大明寺所蔵[10]

4　日朝坐像　身延久遠寺十一世　僧綱衣、七条袈裟・横被　読経像　明応四年（一四九五）　身延町覚林坊所蔵[11]

5　日什坐像　京都妙満寺開山　僧綱衣、七条袈裟・横被　説法像　永正十六年（一五一九）　千葉市善勝寺所蔵[12]

6　日輪坐像　池上本門寺・比企谷妙本寺三世　僧綱衣、七条袈裟・横被　説法像　天正十年（一五八二）　鎌倉市妙本寺所蔵[13]

7　日常坐像　中山法華経寺初祖　僧綱衣、七条袈裟・横被　合掌像　天正十三年（一五八五）　修理　多古町日本寺所蔵[14]

8　日詔坐像　池上本門寺・比企谷妙本寺十四世　僧綱衣、七条袈裟・横被　合掌像　元和三年（一六一七）　鎌倉市妙本寺所蔵[15]

9　日朗坐像　僧綱衣、七条袈裟・横被　合掌像　元和五年（一六一九）　鎌倉市光則寺所蔵[16]

10　日英坐像　妙隆寺開山　僧綱衣、七条袈裟・横被　合掌像　寛永十一年（一六三四）　鎌倉市妙隆寺所蔵[17]

11　日親坐像　京都本法寺開山　僧綱衣、七条袈裟・横被　説法像　寛永十一年（一六三四）　鎌倉市妙隆寺所蔵[18]

などがある（裸形着衣像は除いた）。諸像は、何れも僧綱衣に七条袈裟・横被を着ける高位の衣体である。僧綱衣に七条袈裟・横被を着けるという衣体は、多くの日蓮像と共通するものである。[19]上記の諸像は、祖師やそれに準じる人物として、理想化された姿に造形されているといえよう。

安国論寺像の彩色はかなり剥落しているが、衣は薄墨色、袈裟はやや暗い緑色（縁・威儀など）に茶褐色（条部分）であり、何れにも紋所や地紋などは見られない。後世の修理も考えられ、現在の彩色は造立当初のものではない可能性があるが、彩色から窺える衣体は平僧のものであり、高位の衣体を表したものではない。

法体姿の檀越像で江戸時代以前に遡るものに、横須賀市大明寺の開基である石渡則次坐像がある。本像は、永享七年（一四三五）十二月付の墨書銘があり、造立年次が明確である。衣体は通常の法衣に五条袈裟を着け、合掌しており、安国論寺像と共通する。[20]

この様に、安国論寺像の衣体に見られる特徴は、日朗という高僧の姿には相応していないといえる。以上のことも、遠山因幡の像であることを支証しよう。

安国論寺像の面貌は、額には三本の皺が刻まれ、やせて頬がこけており、えらが張るという、特徴的なものである。像主である遠山因幡が没してからさほど年月を隔てない時期に、像主をよく知る人物が主導して造像が行われたことにより、像主の面貌が反映されたものであろう。銘文に巳刻という没した時刻まで記していることも、同様に考えられる。安国論寺像は、構造や袖先の造りなど、室町後期から桃山期の作風をよく伝える像であると評価されるが、[21]その様な年代観とも整合する。

二

長勝寺の御堂を建立した遠山氏については、貞享二年（一六八五）刊行の『新編鎌倉志』に記述がある。同書は、徳川光圀が延宝年間（一六七二～八一）に臣下の河井恒久らに命じて編纂させた、鎌倉に関する地誌である。同書の長勝寺の項には、

本堂は、小田原北条家の時、遠山因幡守宗為建立す。則夫妻の木像あり。[22]

とある。ここに記される遠山因幡守宗為が、安国論寺像の遠山因幡入道妙助と同一人であることは、明瞭であろう。

遠山因幡入道の事績として、安国論寺像の銘文や『新編鎌倉志』に建立が伝えられる長勝寺の御堂（本堂）は、同寺に現存する法華堂に想定されている。法華堂の建立年代は、内部頭貫木鼻や拳貫などよりみて、十五世紀末ないし十六世紀中期ころと推定されている。「法華堂」の名称を示す扁額の刻銘に

（裏面陰刻）

名越松葉谷

石井山

止行院日處代

延徳二年

庚戌八月　日[23]

とあり、ここに示された延徳二年（一四九〇）を建立年代に比定することも可能であるが、その一方で、法華堂に掛けられていた鰐口に

（陰刻追銘）

奉寄進願主相州鎌倉住人小泉外記助敬白／天文二年癸巳十二月一日[24]

とあり、この銘文に示される天文二年（一五三三）ころに建立年代を比定してよいという。[25]なお、寄進者である小泉外記助については、他の史料所見はない。

遠山因幡入道は、安国論寺像の銘文から延徳二年（一四九〇）生

まれであることが分かる。従って天文二年には四十四歳であったから、建立の施主であるとする安国論寺像銘文や『新編鎌倉志』の記事とも整合する。

小田原北条氏の家臣に遠山氏一族がいたことは、永禄二年（一五五九）二月の『北条氏所領役帳（小田原衆所領役帳）』[26]により確認されるが、遠山因幡守（入道）の記述は見られない。遠山因幡入道の活動については、現在のところ『鶴岡御造営日記』所載の永禄六年（一五六三）七月七日付北条氏康判物が確認されるのみである。[27]本書は

御社中掟条々、

一、御社中少破之時、修理肝要候、御造作不入様、致分別、其時々以書立可遂披露事、

一、毎月十五日、晦日御掃除除可致之、此人足卅人、鎌倉谷七郷積而可申付事、

一、社人中妄之儀有之者、可申上事、

一、御社中枝木成共有取者者、見逢可搦捕事、付而、池之葦相計時節、為苅普請之用可召仕事、

一、御社中ニ繋馬事并往来之者、致不浄儀、堅可禁事、

右、今度改而普請奉行被仰付条、院家中、神主、少別当相談、於何事モ無沙汰（々脱）可被走廻者也、仍状如件、

永禄六年七月七日　　氏康在判

遠山因幡入道

後藤右近将監[28]

というもので、遠山因幡入道は鶴岡八幡宮の法度を後藤右近将監と共に氏康から受けている。両名は同宮の普請奉行として、供僧・神主らと相談してこの五箇条を執行するよう命じられていた。後藤右近将監は、鎌倉代官大道寺盛昌・周勝の許で小代官を務めていたことが知られている。[29]遠山因幡入道も、北条氏の家臣として後藤右近将監と同程度の地位にあったのではなかろうか。

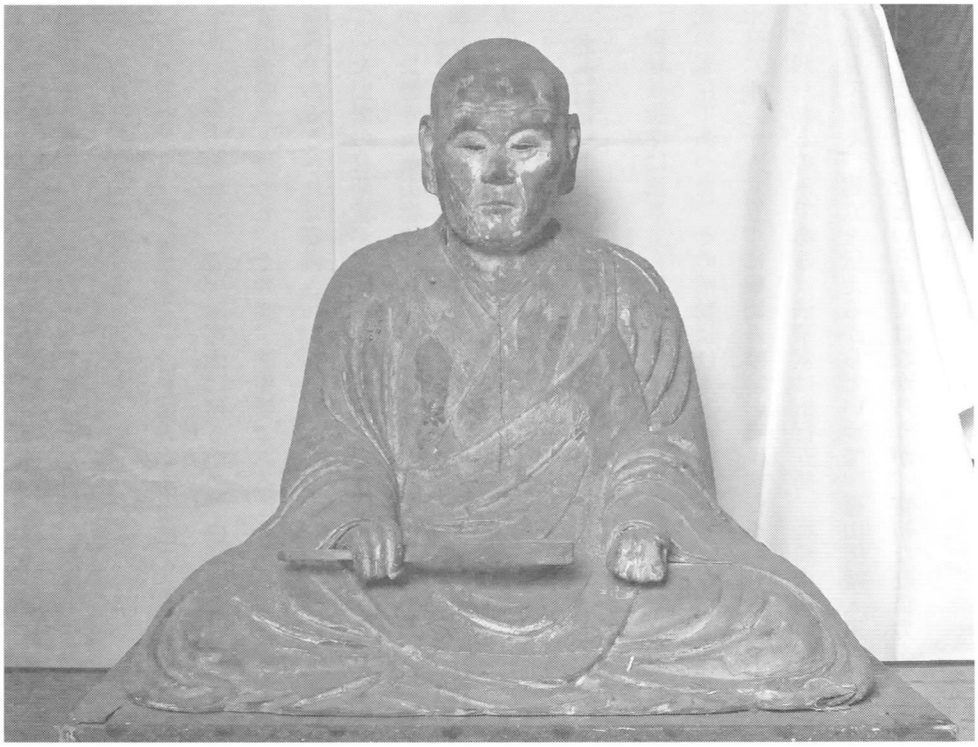
前述したように、『新編鎌倉志』では長勝寺に遠山因幡守夫妻の木像の所在を伝えていた。現在の長勝寺には、記事に相応する様に夫妻像であるとされる法体姿の坐像二躯が伝来しており、法華堂に安置されている。[30]

この内の妻像は寄木造、彫眼の坐像で、法衣に五条袈裟を着し、頭巾をかぶり合掌する。額には皺が刻まれており、老体であることが分かる。像高は三〇・五センチメートルを測る（写真3）。彩色はほとんど剥落しているが、衣はは薄墨色である。像高を見ると、安国論寺像と夫妻像として釣り合う。指先や、衣の袖から出る小袖の表現など、彫刻の細部や衣体の処理のしかたも、安国論寺像と近似している。一方の夫像であるとされるものは（写真4）、法体姿であるものの、像高四〇・五センチメートルと妻像より一〇センチメートルも大きく、夫妻像としては大きさが釣り合わない。五条袈裟に

写真一

写真二

写真三



写真四

は、丸に卍の紋が付けられている。衣体の処理のしかたにも妻像と相違が大きいことから、別人物の像であると考えられる。

妻像は、夫像とされるものと共に江戸時代の作であるとされる。安国論寺像と妻像が本来の夫妻像であるとすれば、長勝寺において夫が御堂建立の重要な檀越であるとしても、時代を隔てた後代にその妻の像を造り添えたと見ることは困難である。妻像も、安国論寺像と同時期の造立であると考えて大過なかろう。東国における戦国期の夫妻像としても、注目される。[31]

なお、長勝寺に所蔵される、同寺の開基檀越である石井長勝坐像の台座には、

（台座上墨書）
日朗菩薩像
相州鎌倉名越谷
奉造栄御衣替　石井山長勝寺　本尊也
現當二世所願成弁
延寶第八庚申歳　勸進發頭
五月上旬三日　三十世覺遠院日成（花押）
寄進之施主
蔵並柾右衛門[32]

とあり、日朗像を延宝八年（一六八〇）に修理したことを記録する。この台座は安国論寺像の旧台座であるとされるが、[33]根拠は明らかではない。石井長勝像は、僧綱衣に七条袈裟・横被を着け合掌する、高僧の姿である。従って、台座に記されるように、石井長勝像は日朗像であるとすべきであろう。であるとすれば、夫像とされるものは、石井長勝像の可能性もあろうか。

安国論寺像は、『新編鎌倉志』に長勝寺所蔵を伝える夫像に比定して良いと考えられる。安国論寺像は何らかの事由により長勝寺から安国論寺へと移され、その後、法体姿であることから同寺開山の日朗像であるとされて安置されたものであろう。安国論寺に安置されていた旧来の日朗像が、[34]何らかの事由により失われたためであろうか。長勝寺所蔵夫妻像は昭和十九年（一九四四）に修理が行われており、[35]安国論寺像の移動はそれ以前のことになるが、明確な資料を見出せない。

おわりに

鎌倉長勝寺に法華堂を建立した遠山因幡入道妙助は、小田原北条氏の家臣であった。その活動はほとんど明らかではなく、わずかに永禄六年（一五六三）に鶴岡八幡宮の普請奉行を命じられていることが知られるのみである。法華堂は桁行五間、梁間六間の規模をもつ仏堂[36]である。建立を伝えるからといって、遠山因幡入道が単独で費用をまかなったという訳ではなかろうが、富裕な経済力を有していたことは間違いない。

日什門流の本興寺（江戸時代に鎌倉から保土ヶ谷に移転）の場合

には、文明十三年（一四八一）の御堂建立に上総の酒井清伝が大檀那となり、永禄二年（一五五九）の修造ではその子孫である胤治と嫡子政茂父子が施主となっている。[37] この御堂は現存せず規模は不明ながら、やはり伽藍の中心的な堂宇であったと思われる。

一方、小田原北条氏の家臣に目を転じると、西郷右京亮と多米新左衛門尉時信が天文二十一年（一五五二）に行われた日陣門流鷲津本興寺の本堂建立の奉加に応じていることが指摘されている。[38] 北条氏の家臣には三河出身が多いことから、同地に展開した各門流との師檀関係を継続していた者もいたのである。

遠山因幡入道坐像は、この様な鎌倉の日蓮宗寺院と檀越との関係、或いは北条氏と日蓮宗との関係について検討を進める上で、一つの確実な史料を提供するものといえよう。また、同像の転変は、流転する諸像[39]の事例としても興味深いものがある。なお、近世初頭に至るまでの長勝寺の変遷については、史料の制約もあり不明な点が多い。[40] 今後の課題である。

註

（1）実査、並びに各種の図録・仏像調査報告書等による。

（2）長勝寺の縁起については、寺尾英智・安中尚史・本間俊文「日蓮聖人史跡の再発見と顕彰の歴史」（『鎌倉・ネパール研究紀要』立正大学研究推進・地域連携センター、二〇一九）参照。

（3）室町・戦国期の鎌倉における日蓮宗の展開に関しては、永享法難が著名である（立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教団全史　上』平楽寺書店、一九六四、二五四頁以下。都守基一「『伝燈鈔』と「永享法難」覚書」『平成十九年度　京都本法寺宝物虫払い出展目録』二〇〇七）。松尾剛次氏は、永享八年（一四三六）の開創を伝える鎌倉本覚寺の檀越に町衆（商人・職人）がいたことを推測する（『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館、一九九三、一七五頁以下）。

（4）安国論寺像については、鎌倉市文化財総合目録編さん委員会編『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』（同朋舎出版、一九八六）安国論寺の項（執筆は山田泰弘氏）、新倉日立監修『鎌倉名越松葉谷　安国論寺資料輯』（安国論寺、一九九九）Ⅰ霊像の部（執筆は山田泰弘氏）、神奈川県立歴史博物館編『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』（日蓮宗神奈川県第二部宗務所、二〇〇九）四八号（列品解説の執筆は薄井和男氏）に図版・銘文・解説等が収録される。

（5）『鎌倉名越松葉谷　安国論寺資料輯』三〇二頁。山田泰弘氏は、安国論寺像について「当銘は後書か。日朗像である点も未詳だが、もと長勝寺安置像であることは恐らく事実であろう」と指摘するが（『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二六五頁）、『鎌倉名越松葉谷　安国論寺資料輯』ではこのことに触れない。

（6）千葉市美術館編『仏像半島』（千葉市美術館・美術館連絡協議会、二〇一三）一六六頁、池上本門寺霊宝殿編『第七百遠忌報恩　日朗菩薩』（池上本門寺、二〇一九）二～三頁。

（7）『第七百遠忌報恩　日朗菩薩』四～五頁。

（8）中山法華経寺誌編纂委員会編『中山法華経寺誌』（同朋舎出版、一九八一）二七三～四・三八三頁、中尾堯・浅見龍介・淺湫毅・緒方啓介編『図説　日蓮聖人と法華の至宝』第四巻彫刻（同朋舎メディアプラン、二〇一三）一七八～九頁。

（9）『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』七九号、横須賀市編『新

横須賀市史　別編　文化遺産』（横須賀市、二〇〇九）八七七～九頁。銘文は横須賀市編『新横須賀市史　資料編古代・中世Ⅱ』（横須賀市、二〇〇七）二一一四号にも収録。

(10)『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』八一号、『新横須賀市史別編　文化遺産』八七五～六頁。同書では木造伝日蓮上人坐像として収録。銘文は『新横須賀市史　資料編古代・中世Ⅱ』二一一九号にも収録。

(11) 山梨県南巨摩郡身延町教育委員会編『身延山久遠寺史料調査報告書』（山梨県南巨摩郡身延町教育委員会、二〇〇四）彫刻図版一四・一五三～四頁。

(12) 紺野敏文編『千葉市の仏像』（千葉市教育委員会社会教育部文化課、一九九二）八一・一五八・二五〇頁。

(13) 中尾堯・寺尾英智監修『妙本寺文書』（本山比企谷妙本寺、二〇〇二）一六〇～一頁。

(14) 東京国立博物館編『大日蓮展』（産経新聞社、二〇〇三）五九頁、『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』六八号。

(15) 池上本門寺霊宝殿編『特別展　自證院日詔聖人』（池上本門寺霊宝殿、二〇一六）三八頁。

(16) 新倉善之編『大田区史（資料編）寺社2』（東京都大田区、一九八三）五五六頁。

(17)『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二〇六頁、『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』八六号、『仏像半島』一六九頁。

(18)『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二〇七～八頁、『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』一一六号。

(19) 富士門流においては、日蓮像をはじめ歴祖像の衣体は、何れも薄墨の僧綱衣に白（灰白色）五条袈裟が用いられており、他門流とは異なりを見せる。坂輪宣敬『仏教美術の廻廊』（宝文館出版、一九八四）二三七頁以下を参照。

(20)『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』八〇号、『新横須賀市史別編　文化遺産』八八三～五頁。銘文は『新横須賀市史　資料編古代・中世Ⅱ』二〇九一号にも収録。石渡則次については、同上書一八四三・一九二五・二〇一四・二〇七八号参照。

(21)『鎌倉名越松葉谷　安国論寺資料輯』三〇一頁。

(22) 蘆田伊人編『大日本地誌大系　新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』（一九二九、雄山閣）一三五頁。

(23) 長勝寺編『神奈川県有形文化財　長勝寺法華堂修理工事報告書』（長勝寺、一九七三）第七三図、鎌倉市文化財総合目録編さん委員会編『鎌倉市文化財総合目録―建造物篇―』（同朋舎出版、一九八七）五一三頁。なお、銘文には「止行院日處代」とある。一方、延徳五年（一四九三）四月二十日付結城政朝安堵状の宛所が「正行院」（神奈川県県民部県史編纂室編『神奈川県史　資料編3　古代・中世（3下）』神奈川県、一九七九、六四〇〇号）であり、また松葉谷本国寺顕彰碑に「正行院日處」（寺尾英智・安中尚史・本間俊文「日蓮聖人史跡の再発見と顕彰の歴史」三七頁）とある。以上のことから、本銘文は書式も含めて更に検討の余地があるように思われる。

(24)『鎌倉市文化財総合目録―建造物篇―』五一三頁、『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』一七三頁。

(25)『鎌倉市文化財総合目録―建造物篇―』五一〇頁。

(26) 平塚市編『平塚市1　資料編　古代・中世』（平塚市、一九八五）、佐脇栄智校注『小田原衆所領役帳　戦国遺文後北条氏編別巻』（東京堂出版、一九九八）収録。『北条氏所領役帳』については「解題」（『平塚市1　資料編古代・中世』）参照。

(27) 戦国人名辞典編集委員会編『戦国人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇六）「遠山因幡入道」の項（佐脇栄智氏執筆）。なお、戦国期における関東の日蓮宗檀越について多くの記事がある『本土寺過去帳』（『千葉縣史料　中世

篇　本土寺過去帳』や『妙本寺大堂常什過去帳』（『大田区史（資料編）寺社2』）にも、記述は確認できない。

(28) 下山治久編『戦国遺文　後北条氏編』補遺編（東京堂出版、二〇〇〇）八九頁。

(29) 『戦国人名辞典』「後藤右近将監」の項（佐脇栄智氏執筆）。

(30) 『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二七一頁。

(31) 本稿「はじめに」において言及した石井則次夫妻像（横須賀市大明寺）も、夫像は永享七年（一四三五）造立であることが明らかであるが、妻像は江戸時代の夫像の修理と同時期の造立であるとされる（『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』八〇号、『新横須賀市史　別編　文化遺産』八八三～五頁）。しかし、妻像に存する銘文は、造立銘ではなく、夫像と同様に修理銘であると理解できる。妻像も、夫像と同時期に造立されたと考えられよう。

(32) 『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二七〇頁、一部を改めた。なお、三十世と自記する覺遠院日成は、現在の歴代譜では二十九世となっている（日蓮宗寺院大鑑編集委員会編『日蓮宗寺院大鑑』大本山池上本門寺、一九八一、一二八頁）。

(33) 『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二七〇頁。

(34) 安国論寺に日朗像が安置されていたことは、嘉永七年（一八五四）『安國寺什物帳』に記載がある（『鎌倉名越松葉谷　安国論寺資料輯』四〇一頁）。なお、大正十年（一九二一）の『寺院由緒等申告書』にも「朗師霊像　一軀」が安置されたいたことが記録されるが（同上書、四二一頁）、『安國寺什物帳』記載の像との関係は未詳である。

(35) 夫妻像の各台座裏に次の墨書銘（文字配置に小異があるが同一文）がある。『鎌倉市文化財総合目録―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』二七一頁参照。

（妻像台座裏）

奉修補鎌倉長勝寺
法華堂安置僧形像
二躯
昭和十九年十月日
当山五十三世日璨代
修造者
日本美術報国会第三部
会員
鎌倉文化聯盟美術部理事
斎田秀晃（印）

(36) 『鎌倉市文化財総合目録―建造物篇―』五〇九頁。

(37) 永禄二年（一五五九）九月七日付棟札（『大田区史（資料編）寺社2』五四五頁。黒田基樹・佐藤博信・滝川恒昭・森本昌広編『戦国遺文　房総編』第二巻、東京堂出版、二〇一一、九九五号）。

(38) 下山治久「北条早雲と三河武士」『戦国遺文　月報』七、二〇〇〇。下山氏は天文二十一年に行われたのは仏殿修復であるとするが、冠賢一氏は本堂建立であると指摘する（冠賢一「東海日蓮教団の展開―遠州鷲津本興寺を中心として―」、影山堯雄編『中世法華仏教の展開』平楽寺書店、一九七四）。

(39) 鴨川市誕生寺所蔵の日家坐像は、日朗像として万治二年（一六五九）に造立されたが、誕生寺に伝わると日家像となり、一旦日朗像に戻されるも再び日家像とされた（拙稿「日家上人像の転変」『こみなと』平成二十五年四月号。『天津小湊の神仏像調査報告書』天津小湊町、二〇〇四、二六九号）。淺湫毅「理由ありて日蓮宗寺院の尊像となれり」（『図説　日蓮聖人と法華の至宝』第四巻彫刻）参照。

(40) 長勝寺の濫觴である名越松葉谷法華道場については、都守基一「妙龍院日静聖人遺芳」、同「妙龍院日静聖人関係寺院一覧・伝記集・年譜」（共に

『法華学報別冊』第二四号、二〇一八）が最新の研究である。

付記　諸像の調査並びに写真掲載に当たり、安国論寺住職平井智親氏、長勝寺住職久村眞道氏、同寺山務員中村文康氏のご高配をいただきました。また安藤昌就氏に資料提供のご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

Summary

A Study of the Seated Statue of Tōyama Inaba Nyūdō
——A Member and Contributor of the Nichiren-shū in Kamakura during Sengoku Period——

Eichi TERAO

Tōyama Inaba Nyūdō (遠山因幡入道) was one of the dependable members of the Nichiren-shū in Sengoku period. He donated the main hall to Chōshō-ji Temple (長勝寺) in Kamakura and the temple has placed a statue of Mr. and Mrs. Tōyama to honor his contribution. Tōyama Inaba was a vassal of Odawara Hōjō clan (小田原北条氏) who was in charge of managing the construction of Tsurugaoka Hachimangū Shrine (鶴岡八幡宮) in Kamakura.

This paper is intended to explain that the seated statue of Ankokuron-ji Temple (安国論寺) in Kamakura, which has been said to be the statue of Venerable Nichirō (日朗), is actually a statue of Tōyama Inaba by pointing out some features and historical documents of the statue.